

今、問われていること

2020年2月以降、世界中の人間は新型コロナウイルス感染症による死の恐怖を抱き続けています。日本でも有名人の突然の死をきっかけに、「私の死」が身近なものとなりました。コロナ対策として「三密」「ソーシャルディスタンス」「マスク・手洗い・アルコール消毒」という言葉が飛び交い、感染防止を徹底する生活が当たり前となりました。このように生活が一変すると、人間の本性が見え隠れしてきます。

感染防止のために消毒用アルコールやマスクの着用が国によって推奨されると、品物不足への不安に駆られて品物の買い占めが起こり、感染防止に直接関係のないトイレ・トペーパーの買いだめをする人まで現れました。

また、政府が「不要不急の外出は避けるように」と緊急事態宣言を出すと、それを忠実に守る人の中には外出・営業の自粛を他人に強要する、いわゆる「自粛警察」が現れるようになります。

そして感染者が出ると、自分の感染症対策への不十分さを棚に上げ、感染した本人を必要以上に追及します。さらには感染者の家族にまで怒りの矛先が向き、いわれなき差別や中傷被害が起こり、感染者家族が地元で生活できなくなるという事件になっています。感染を恐れてか、地元ナンバー以外の車には嫌がらせをするという人まで現れました。ここまでくると感染症への対策の本質が見えなくなっており、新型コロナウイルス感染症へのあやまった・偏った対応が目につきます。

すこし無理やりかもしれませんが、

買い占め・買いだめは　　貪欲【とんよく】（むさぼり）

「自粛警察」は　　瞋恚【しんに】（いかり）

コロナへの偏った対応は　　愚痴【ぐち】（おろかさ）

にあてはまるようにも思えるのです。まさに今回の新型コロナウイルスは、「人間は貪・瞋・痴の三毒の煩惱を持つ身である」ことを私たちにつきつけたのです。

「コロナよりも怖いのは人間だった」〈Twitterより〉

ところで、「コロナにかからないようにする」ということは、「死なないように生活する」ということでしょう。つまり私たちは必然である死を恐れ、死なないことを願って日々の生活を送っているということになります。では、常に死を恐れて生きている私たちは、今あるその生をどのようにとらえているのでしょうか。死なないように、健康にと願うその生（いいのち）を、私たちは本当に生きているのでしょうか。

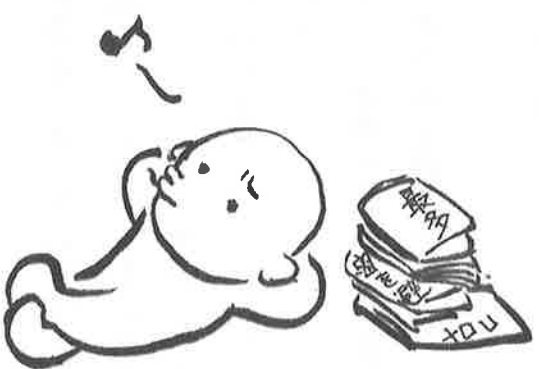
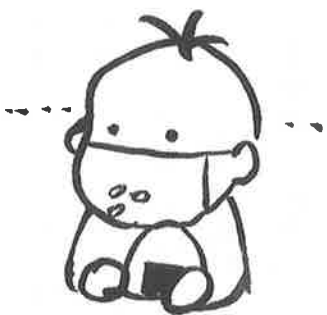
「死を恐れる人は多いが 生を尊ぶ人は少ない」

死ぬことを恐れ、死なないことにはあらゆる手立てを尽くしている私たちではありませんが、その一方で「今いのちがわたしにある」ことをほんとうに考えているのでしょうか。人として生まれ、今ここに生きていることの意味をたずねずに、ただ死なないように生きているだけでは、いつまでたってもその生に満足することはないのでないのでしょうか。

人間は意味を大事にする生き物です。生きている意味・生まれたことの意味が私の中であきらかになれば、いつ・いかなる形で死がおとずれようとも「悔いなく虚しくない人生だった」と、その時が来るまで生ききっていけるのではないのでしょうか。

「死にたくない」から「なぜ生まれたのか」「なぜ生きているのか」へ。「見えない死」への不安から「今ある生」への方向転換こそ、はるか昔から南無阿弥陀仏がわたしたちに語りかけ続けてくださり、宗祖親鸞聖人誕生八五〇年をお迎えする今こそ問われているメッセージであるようにも思えるのです。

「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」



二〇二〇年七月二十八日

高田教区教化委員会副本部長

第六組 善念寺住職 滋野康賢